

古くて
新しい、
みまさかのくに
美作国の
うつろい

2025年度実施レポート

The image displays a variety of Japanese bookplates, each with its own artistic style and owner information. Notable examples include:

- Top Left:** A card with a vase illustration and the text "桐潤敬子" (Kiryū Keiko) and "蔵書" (Collection).
- Top Center:** A card featuring a stylized figure and the text "春和堂蔵" (Harukadō Zō).
- Top Right:** A card with a tiger illustration and the text "EX-LIBRIS" and "坂本" (Sakamoto).
- Middle Left:** A card with a figure in a kimono and the text "河伯洞蔵" (Kahaku-dō Zō).
- Middle Center:** A card with a stylized figure and the text "伊木蔵章" (Ikeda Sōshō).
- Middle Right:** A card with a stylized figure and the text "EX-LIBRIS" and "蔵" (Collection).
- Bottom Left:** A card with a stylized figure and the text "山人文庫" (Yamanaka Bunko) and "加愛書" (Kai Shō).
- Bottom Center:** A card with a stylized figure and the text "船館蔵書" (Funekan Zō Shō).
- Bottom Right:** A card with a stylized figure and the text "EX-LIBRIS" and "T. SIGEMATU".



おかやま文化芸術
アソシエイツ
OKAYAMA Culture & Arts Associates

About.

mimasaka no kuni

美作国(みまさかのくに)とは

平安時代に編まれた史書『続日本紀(しょくにほんぎ)』によると、美作国は和同6年(713年)、備前国から美多郡・勝田郡・苦田郡・久米郡・大庭郡・眞嶋郡の北部6郡が分かれて誕生したとあります。これは、現在の岡山県北10市町村(津山市、真庭市、美作市、新庄村、鏡野町、勝央町、奈義町、西粟倉村、久米南町、美咲町)とほぼ重なります。

● アートと出会う“温泉の国”

美作国を代表する湯原温泉・奥津温泉・湯郷温泉の「美作三湯」を舞台に、3年に一度開催される回遊型アートイベント「美作三湯芸術温度」。イベント終了後も多くの作品が宿泊施設などに残されており、現在も鑑賞することができます。温泉地を巡りながら、美作三湯ならではのアートの世界を楽しめるのも、この地域ならではの魅力です。

● 森・街・美術館を巡る“アートの国”

美作国には、美術館や博物館、資料館など、多彩な文化施設が点在しています。また、「森の芸術祭 晴れの国・岡山」の舞台としても注目を集めています。世界的な建築家・磯崎新氏がプロデュースした奈義町現代美術館では、建築家とアーティストのコラボレーションによって実現した空間芸術を体感できるほか、世界でも珍しいウランガラスを常設展示する妖精の森ガラス美術館など、個性豊かな芸術文化を楽しむことができます。

● 歴史と伝統が息づく“文化財の国”

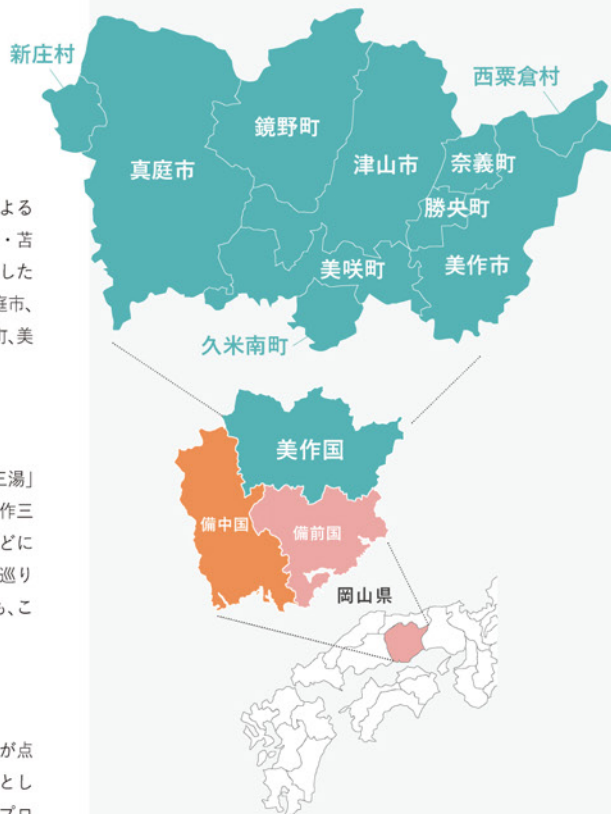
国の重要無形民俗文化財であり、ユネスコ無形文化遺産「風流踊」の一つにも登録されている大宮踊をはじめ、地域に受け継がれる盆踊りや獅子舞、神楽などが今も大切に継承されています。江戸時代から続く地歌舞伎は、地域の人々によって受け継がれてきた貴重な文化遺産です。今もなお暮らしの中に息づく伝統文化が、美作国ならではの魅力となっています。



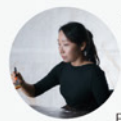
さらに詳しい情報は、
岡山県北美作エリア観光サイト
「美作国」をチェック!

美作国 <https://www.mimasaka-no-kuni.jp/>

このページは、「美作国(岡山県美作市)」の情報をもとに作成しております。



おかやま県民文化祭「これがOKAYAMA!」プログラムは、金孝妍(キム・ヒョヨン)氏の企画・監修のもと、岡山県内の優れた文化・芸術資源を掘り起こし、その価値を県民の皆様が再認識することを目的として、おかやま文化芸術アソシエイツが運営・実施しています。



金孝妍 キム・ヒョヨン
<プロフィール>1980 韓国済州島生まれ。2001 École Nationale Supérieure des Beaux-Arts de Paris, France 交換留学。

2003 弘益大学校美術大学 絵画科 卒業(韓国・ソウル)。
2005 弘益大学校一般大学院 絵画科修士 修了(韓国・ソウル)。
2018 倉敷芸術科学大学大学院 芸術研究科 芸術制作表現専攻博士課程 修了/2023 倉敷芸術科学大学芸術学部 講師(〜3月)現在、岡山市在住。
<主な賞歴>2017 岡山県新進美術家育成!氏賞 奨励賞。
2023年4月、おかやま文化芸術アソシエイツのプログラム・コーディネーターに就任。

「古い」とは、過ぎ去ったものではなく、まだ探り尽くされていない未来像の層でもあります。現代社会が「効率」や「標準化」を優先するなかで見過されてきた「寄り道」や「余白」には、むしろ逸脱的で創造的な道筋が潜んでいます。私たちは、そうした地域の文化的エッジにあためて目を凝らし、地域に寄り添う丁寧なまなざしを通して、「古くて新しい・昔の今」に焦点を当てる必要があります。

「古い」とは、過ぎ去ったものではなく、まだ探り尽くされていない未来像の層でもあります。現代社会が「効率」や「標準化」を優先するなかで見過されてきた「寄り道」や「余白」には、むしろ逸脱的で創造的な道筋が潜んでいます。私たちは、そうした地域の文化的エッジにあためて目を凝らし、地域に寄り添う丁寧なまなざしを通して、「古くて新しい・昔の今」に焦点を当てる必要があります。

また、真庭市蒜山地域の伝統工芸である郷原漆器は、素朴ながらも堅牢な作りが特徴で、江戸時代より庶民の生活に根差してきました。かつて日常使いの器として親しまれた郷原漆器は、一時衰退の危機にありましたが、今では若い職人による技術継承や、現代の暮らしに合ったデザイン提案など、新たな動きが始まっています。その再生のプロセスそのものが、地域文化に対する現代的なまなざしの現れとも言えるでしょう。同じく真庭市内の山里、お茶の産地としても知られる富原地区では、古来の木灰の灰汁を使用した伝統製法によってこんにやくを作る取り組みが、2016年に地元有志により復活しました。山間の畑で育ったこんにやく芋の収穫時期にはこんにやく作り体験もでき、その素朴な味わいが、地元の気候風土に根ざした食文化として注目されています。

さらに、美作地域に残る方言や語り口の中には、時間を超えた知のありようや人々の関係性が刻まれており、それは現在の地域コミュニケーションを豊かにする資源となり得ます。

おかやま県民文化祭「これがOKAYAMA!」プログラム」の企画では、毎年、単に地域資源の表層をなぞるのではなく、その背後にある時間の重層性と、そこに息づく生活の声に耳を傾けています。令和7年度「これがOKAYAMA!」プログラムでは、美作地域を舞台に「古くて新しい、美作国のうつろい」をテーマとして取り上げました。「古くて新しい」とは、単なるノスタルジーではなく、今を生きる私たちが未来への選択肢を拡張するための視座なのです。伝統的に続いていることについての今、古い場所の現時点、無形のもの、継承の仕方の変化など、自ら興味をそそぎ覗いてみたいと思えづらいものに今回光を当ててみます。知っていたもの、知っている気になっていたものの「新しさ」を是非見つけてみてください。

企画・監修
おかやま文化芸術アソシエイツ
プログラム・コーディネーター 金孝妍

2025年の
テーマ

古くて新しい、美作国のうつろい

みまさかのくに

久米南町が生んだ愛書家

志茂太郎と久米南町図書館の軌跡

本の見返しにひっそりと貼られ、その本の持ち主を示す「書票（エクスリブリス）」。

それは単なる所有印にとどまらず、蔵書家の思想や趣味、美意識を凝縮した小さな美術品です。この書票の文化を日本に根付かせた中心人物が、久米南町出身の志茂太郎（しもたろう）であることをご存知でしょうか。

現在、彼の故郷にある久米南町図書館では、志茂太郎と書票の魅力を伝える活動が活発に行われています。志茂太郎（1900〜1980年）は、久米南町山ノ城に生まれました。東京で書店を営む傍ら、個人出版社「アオイ書房」を設立し、愛書誌「書窓」などの優れた書物を刊行しました。彼は活字と書物をこよなく愛し、戦時中の厳しい言論統制や出版事情の中にあっても、出版文化の火を守り抜こうとした情熱の人物です。

戦局の悪化に伴い郷里の久米南町に帰郷した後も、本への情熱が冷めることはありませんでした。1943年（昭和18年）に書票の普及を目的として「日本愛書協会」を創設。これが、現在も活動を続ける「日本書票協会」（1957年改称の礎となりました。彼は生涯をかけて書票の普及と発展に尽力し、その手のひらサイズのキャンパスに

スに込められた芸術性を世に知らしめたのです。

書票の歴史は15世紀のヨーロッパにまで遡り、日本では明治時代以降に西洋から本格的に紹介されました。木版画、銅版画、活版印刷などの手仕事为主流で、その美しい意匠から愛書家同士での交換が盛んに行われるようになり、趣味人たちの豊かな交流を生み出す道具でもありました。現代ではデジタル技術によるデザインも普及、書票は単なる蔵書印の枠を超え、版画芸術の一つとして国際的なコレクターも存在します。デジタル時代にあえて紙の温もりや手仕事の価値が見直されている今、書票の魅力は再び輝きを放っているのです。久米南町図書館では、この偉大な郷土の先人である志茂太郎の功績を後世に伝えるため、2010年から積極的な取り組みをスタートさせました。当初は、1件のレファレンス（調査相談）をきっかけとして始まり、その後、書票づくりワークショップの開催や常設展示など、地道な普及活動が続けてきました。この10年以上にわたる図書館の熱意ある活動は、広く知られるところとなりました。その結果、近年における画期的な出来事として、日本

書票協会から久米南町図書館へ、数多くの貴重な書票が寄贈されたのです。創設者の故郷で書票文化が大切に育まれていることに対する、協会からの深い敬意と共鳴の証といえるでしょう。この寄贈を受け、図書館では「彩いろとりどりの書票展」といった特別展示を開催し、寄贈された多様な書票作品を公開しています。その中には、雑誌「書窓」を共に創り上げた創作版画の巨匠であり、志茂太郎の最大の理解者であった恩地孝四郎の作品は、もちろんのこと、版画家の武井武雄や染色家の芹沢銈介といった、日本美術史に名を刻む芸術家たちの書票も含まれています。来館者が直接、本物に触れるだけでなく、一般から募集した書票デザインへの投票企画を実施するなど、町民が主体的に参加できる「身近なアートの場」として機能しています。

志茂太郎が愛した「書票」という小さな芸術は、時を超えて久米南町の地に深く根を下ろし始めました。久米南町図書館の取り組みは、単なる郷土史の紹介にとどまらず、本を大切に「心」を次世代へ育み、長い時を刻み深みを増した美意識に、現代の人々が直接触れられる場をひらく実践といえるでしょう。



版画家 武井武雄 作



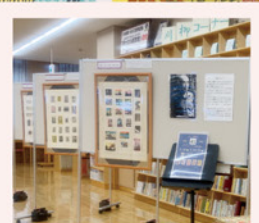
版画家 恩地孝四郎 作



染色家 芹沢銈介 作



版画家 恩地孝四郎 作
志茂太郎の蔵書票



久米南町図書館 特別展示の様子

田熊の舞台が 繋ぐ記憶と、 広野子ども歌舞伎の 新たな幕開け

吉井川の水運と出雲街道が交差する岡山県北部の美作地方は、江戸時代から物流の拠点として栄え、豊かな経済力と最新文化を楽しむ気風がありました。津山市の広野地域には、その歴史の証明として国指定重要有形民俗文化財「田熊（たのくま）の舞台」が残されています。創建当時の本格的な回り舞台や奈落の機構が良好な状態で保存されている、全国でも屈指の価値を持つこの舞台は、かつて播州（兵庫県南西部）の役者が興行に訪れるほど活気ある農村歌舞伎の中心地でした。時代の波により2005年を最後に公演は途絶えましたが、この「場所」は、威風堂々とした姿で地域を見守りながら、再び命が吹き込まれる日を静かに待っていたように感じられました。

「昔はね、私もこの舞台に立って歌舞伎を演じていたんだよ」。かつて実際に田熊の舞台に上がり、役者として汗を流したかつての若者たち——つまり自身の親や祖父母から、直接当時の熱気を聞かされて育った若い保護者たち。そしてその子どもたちにとって、目の前にそびえる立派な舞台という「実体」は、遠い昔話ではなく、家族の記憶と地続きの鮮やかな実感へと変わり



ます。「親たちが輝いていたこの素晴らしい歴史と舞台、地域の原風景を失うくらいなら、なんとかして守りたい」。舞台が静かに語りかける歴史の重みと家族の記憶が住民たちの心を動かしました。そして2022年、広野公民館で「広野子ども歌舞伎教室」が開講。翌年には、コロナ禍を経た地域を再び元気づけようと、国指定50周年記念事業を前倒しする形で初公演が行われ、残された「場所」が、現代の人々のエネルギーを呼び覚ましたのです。もちろん、現代において歌舞伎を運営することは並大抵の苦勞ではありません。しかし、田熊の舞台を中心に、地域の人々が支え合う見事な関係図が出来上がっています。主役である子どもたちと、小道具や日々の送迎を担う保護者たち、そして舞台裏を支える町内会。さらに本番では、八幡ふれあい太鼓や津山東中学校の吹奏楽部、日本舞踊の団体などが共演し、世代や分野を超えた協力体制が築かれています。この地域ぐるみの関わり合いこそが広野の地域性を色濃く、ここで生まれ育った人々にとって、他に代えがたい誇りと価値を生み出しているのです。

そして、この温かい繋がりは地域内にとどまりませ

る。復活当初から多大な協力を得ている近隣の奈義町「横仙歌舞伎」との絆は、県北一帯で互いに伝統の灯を守り合う、素晴らしい助け合いの象徴です。広野の人々はその広域のネットワークに感謝しつつ、今、自分たちでできることを少しずつ増やしています。保護者たちが生地に絵柄を描いて衣装を手作りし、子どもたちの意見も取り入れる。高価なかつらも少しずつ揃えて今年ようやく5人分を用意し、専門家に頼っていた舞台化粧も自ら材料を取り寄せて学び始めています。これは単に外部に頼らないためではなく、地域の伝統を「自分たちの手で作り上げるもの」として深く理解し、未来へ手渡すための意義深い取り組みです。これらの準備は、2026年の第4回公演に向けて熱を帯びながら進められています。

先人たちが残した「田熊の舞台」という場所があるからこそ、人々が集い、対話し、熱量を持って動き出す。過去の遺物が現代の人々を結びつけ、地域にエネルギーが循環していく。そこには、場所と人が呼応し合い、生きたコミュニティを紡ぎ続ける、地域文化の最も美しい姿があります。

※本冊子中の地下芝居（じげしばい）や、地芸芝居（じげいしばい）は、いずれも「地芝居」と同義です。
地芝居とは、地域の人々が自ら演じ、受け継いできた歌舞伎などの伝統芸能の総称です。

地域とアーティストが 出会って生まれた表現



春公演「義経千本桜道行の段」

横仙歌舞伎は、江戸時代後期から奈義町で受け継がれてきた伝統芸能です。古くは地域の数少ない農村歌舞伎として、今では地域の絆を深める年中行事として親しまれています。

保存会では県内で唯一自ら衣裳、かつらを保有しており、年2回の定期公演、県内外への出張公演などがあります。特に、回り舞台のある松神社で行われ、昔ながらの形式が感じられる春公演、歌舞伎にも対応した奈義町文化センターの大ホールで行われる秋の大公演は見応えがあります。平成8年・12年には奈義町として「歌舞伎専門職員」を採用するなど、積極的な保存伝承活動でも知られていて、県内の地芝居文化の中心的存在となっています。

2024年に行われた「森の芸術祭 晴れの国・岡山」では、参加アーティストである森山未来が、芸術祭の活動として町と保存会の全面的な協力を得ながら新作歌舞伎の制作に取り組み、お披露目の場としてイベント「さんぶたろう祭り」を企画。町内外の多くの人と協働するという出来事もありました。これは、それまでの取り組みが生かされたことはもちろん、タイミングも良く、多くのプロが関わることで実現できたそうです。歌舞伎専門職員の二宮直基さんは、「彼らが入ってきて、伝統芸能に光を当ててくれた。嬉しかったし、町の人たちが関わりを誇りに思ってくれたのがよかった。」と語ります。

まず前提として、奈義町は都市部よりも伝統や文化を大事にする風潮がある上に、奈義町現

横仙
歌舞伎の
新作

「墨染

鬼

」と

森の芸術祭

代美術館など、先端的な文化事業に触れられる環境もあります。歌舞伎専門職員の配置後は、町の小学校の授業の中で保存会指導による「こども歌舞伎教室」を開始。その流れで舞台にも挑戦してくれる子どもが毎年現れるようになり、保存会の雰囲気も変わってきていました。一方で、活動がマンネリ気味にもなっていた時期でもあったそうです。

そんな中で、2023年秋に芸術祭のリサーチで奈義町に1週間滞在した森山さんが、歌舞伎の三番叟(さんばそう、主要な演目のひとつ)を学び、その後『さんぶたろう』という町の伝説に出会って、それで新作を作ることとなりました。3か月という超短期間で制作したそうです。一流の歌舞伎脚本家や振付家、音楽家の方などが携わることであつという間に骨格が出来上がり、作品に登場する大蛇(おろち)は島根の石見(いわみ)神楽から招聘するなど、趣向が凝らされました。またとない機会に出演する地域の方々も盛り上がり、高齢の方が夜遅くまで練習するなど懸命に取り組んだそうです。保存・伝承をしなければという義務感よりも「楽しいからやっている」という雰囲気だったと、参加者は振り返ります。

公演とお祭りは、美術館前の大通りを封鎖して盛大に行われ、大成功を収めました。その後も、形を変えて秋の大公演でも作品が披露されたり、音楽家が夏祭りに参加してくれたり、照明演出家が美術館のプログラムに参加されるなどの動きがあります。そして町としても、森山さんには文化アドバイザーとして関わりを継続いただくとのこと。地域で新たに生まれた表現やお祭りは、このような形で、多様に地域で継承されていくのでしょうか。



秋公演「墨染鬼 三穂太郎譚」



春日座を拠点に循環する、
美作の生きた伝統芸能

美作市の粟井春日歌舞伎は、江戸時代末期に播州歌舞伎の影響を受けて美作東部に広まった農村歌舞伎(地下芝居)のひとつです。かつて出雲街道を通じて上方(関西)の文化や旅芸人が流入した地理的背景もあり、神様への奉納芝居として春日神社の境内で長年親しまれてきました。戦後のテレビ普及などにより一時は観客が減少し、1977年(昭和52年)に保存会が結成され、1993年(平成5年)には立派な専用の芝居小屋「春日座」が建設されました。この舞台の維持管理には多大な労力と費用がかかりますが、保存会を軸に、住民の寄付やボランティアによって支えられています。春日座は地域の誇りであり、そこで演じられる粟井春日歌舞伎は、今も地域の人々の生活で生きている伝統芸能です。そんな粟井春日歌舞伎を力強く支えているのが、子どもたちの参加です。1998年(平成10年)から地元で小学6年生になったら、舞台上で演じられるようになり(現在は粟井小の合併により江見小の児童が上演)、これが地域に極めて「良い循環」を生み出すことになるのです。子どもが舞台上に立つことで、親や祖父母など家族全員が歌舞伎に関心を持つようになります。実際に親子3代で舞台上に立つこともあります。小学6年生という多感な時期に本格的な舞台で演じ、大きな拍手を浴びた原体験は、大人になっても色褪せることはありません。その誇りと感動の記憶が、やがて彼らが大人になった時、地域の伝統を支える側へと回る強い原動力となっているのです。歌舞伎を長く続ける上で大きな助けとなっているのが、現代ならではの「記録」と「連携」の環境です。美作市ケーブルテレビ「みまちゃんネル」が毎年公演を撮影して放送し、さらにその映像がYouTubeにアーカイブ(保存)されています。これにより、映像記録がいつでも見られるようになり、経験の浅い役者や子どもたちが

子ども歌舞伎「義経千本桜 道行の段」



見て学ぶ「生きた資料」として機能しています。さらに、衣裳や道具などを近隣の奈義町(横仙歌舞伎)から借りられることも、非常に重要な要素です。ひとつの地域だけで全てを抱え込むのではなく、岡山県北一帯に残る歌舞伎文化の広域ネットワークが、互いに助け合いながら伝統の灯を守り続けています。そして、粟井春日歌舞伎の公演で最も熱気を帯びるのが、子ども歌舞伎で実践されている「おひねり(投げ銭)です。これは決して、芝居を見るための入場料や、役者への個人的なチップではありません。歌舞伎文化である、この風習を通じて伝えたいのは、「おひねりを投げることで、観客も一緒に舞台を盛り上げる(参加者)になってほしい」という思いです。舞台に向かっておひねりが宙を舞い、声援が飛び瞬間、観客は単なる傍観者ではなく、「地域の伝統を共に作り、維持する当事者の一人」となります。粟井春日歌舞伎が現代の姿として私たちに語りかけているのは、「伝統とは人が関わり合って初めて生き続けるものである」という力強いメッセージです。時代の変化にただ抗うのではなく、新しい風を柔軟に取り入れながら、人々の「関係性」という最も大切な根幹を守り抜こうとする地域コミュニティの理想的な姿があります。

キーパーソン&工夫集

Key People & Best Practices

1 それぞれが当事者になる 「塗り絵チラシ」

祭りを知らせるチラシを「塗り絵形式」にし、地域の子どもや住民に色を塗ってもらいイベントを開催。完成したものはポスターとして街を彩りました。

工夫した人 勝山踊りましょう会

準備段階から地域の人々に参加してもらうことで、「自分の作品が祭りを彩る」というワクワク感と当事者意識を自然に育みました。

3 地域の昔を知る 「手作り歴史劇」

勝山の昔の出来事や歴史的な背景を題材にした劇を、地域住民が自ら脚本を書き、演じました。劇団四季桜というグループが結成されました。

工夫した人 地域の有志

お祭りという楽しい場を通じて、次の世代へ自分たちの住む町の歴史やルーツをみんなが楽しむ形で伝える有益な時間となりました。

5 声で地域をもっと知ってもらう 「まにわ図書館ラジオ」

図書館の音声配信を活用し、地域のことをよく知る方々をゲストに招いてインタビューを配信しました。

工夫した人 江南さん、真庭市立中央図書館

文字だけでは伝わりにくい「盆踊りの思い出」や「先祖供養の想い」という生きた声をアーカイブ化し、現代版の口承伝承として次世代に残しています。

2 自由度は高く、負担は低い 「もちより」の仕組み

一人ひとりが特技や時間、アイデアを「持ち寄る」ことで祭りを準備する形へと転換しました。食材を持ち寄り、用意された七輪で焼いて食べるBBQイベントや景品も持ち寄りにして、盆踊りに参加した人にクジ付きうちわを渡して誰もが参加できるように促しました。

工夫した人 真庭市立中央図書館

資金集めや特定の人への負担を減らし、「できることで関わる」という自由度の高い参加の仕組みを作りました。

4 オンラインで距離を越える 「ZOOM稽古」

伝統芸能の練習にオンライン会議ツール(ZOOM)を導入し、全国のあらゆる人に画面越しでの参加を呼びかけました。

工夫した人 地域おこし協力隊 森さん

勝山を離れた若者や、県外の人にアプローチ。オンラインでの交流がきっかけで、当日他県から足を運んでくれるという新しい関係人口を生み出しました。

6 日常の挨拶が祭りを育てる 「コミュニケーション」

特別な声かけ以上に、日常的なご近所付き合いや日々の挨拶を何よりも大切にしました。

工夫した人 勝山に暮らす人々

祭りをつくること自体が普段のつながりを育むきっかけとなり、その温かい関係性がそのまま祭りの熱気へとつながりました。

BonOdori



わたしたちの
つなぎかた

～勝山・千代萬歳豊稔踊のいま～

真庭市勝山で江戸時代から260年続く盆踊り「千代萬歳豊稔踊」。七五調の歌詞と太鼓、尺八、三味線の生演奏で親しまれてきた夏の風物詩も、近年は担い手の減少やコロナ禍により夏の盆踊りも中断を余儀なくされ、世代交代という時期が訪れていました。しかし、一度は途絶えかけたこの伝統は今、見事に活気を取り戻しています。その背景にあったのは、「伝統だから守らなければ」と重く背負うのではなく、「みんなで楽しむ」と第一にした住民たちの温かく柔軟な試みでした。

2020年に勝山へ移住した音楽家の江南泰佐さんが、地域の文化に魅了されたことをひとつのきっかけとして、2023年に住民有志による「勝山踊りましょう会」が発足。「勝山もちより盆踊り」として新たなスタートを切り、3年目を迎えました。

江南さんがこの活動の中で、尺八の師匠(保存会の方)から教わり、大切にしている言葉があります。それは「自由自在」。これは、「好き放題にやる」という意味ではなく、「その時に思ったこと、こんな景色がこのまににあったらいいな」と願う景色を、そのまま素直にやってみよう」ということ。伝統を型として縛るのではなく、今のまにに生きる人々が心地よいと感じる形へと、敬意を持ちながら柔軟に変化させていくという、この「自由自在」の精神こそが、勝山の盆踊りを再び蘇らせたのだと思います。

伝統を未来へつなぐ本場の原動力は、地域に暮らす一人ひとりの「得意なことを持ち寄り」や「日常の温かい関係性」から育まれていくのかもしれません。

移住者の新しい視点、保存会が守り抜いてきた歴史、若者によるデジタルの活用、そして誰もが参加できる図書館の場づくり。異なる立場の人々が「自由自在」に手を取り合ったことで、伝統は現代にフィットした新しい形へと生まれ変わりました。

勝山で生まれた小さな工夫の数々と、そこに込められた人々の想いは、岡山県内で文化の継承に奮闘する皆さまにとって、次世代とつながるための明るいヒントになることでしょう。



こちらもチェック!

キーパーソンのインタビューが見られる動画を公開中!!

YouTube **OKAYAMA CULTURE** **VtV**
訪問実験室! 文化芸術が生まれてくる現場 vol.9
「わたしたちのつなぎかた」～勝山・千代萬歳豊稔踊のいま～
(文化芸術交流実験室 vol.52)





東栗倉ZINE

美作市・東栗倉を舞台としたスーパー・ローカル・移住マガジンをうたう全11号のシリーズ。移住者である地域おこし協力隊(当時)の吉川さんならではの視点で地域の気になる人やものごとを取り上げている。特集は「誤字」「バスタブ」「住人」「紫色の服を着ている女性」「案山子」など。

編集・発行：吉川となり(僕press)
#美作

岡山100名墳

古墳好きな小学生(当時)が、県内で訪れた900以上の古墳から激選した100の古墳を紹介している。県内最大の方前方墳「植月寺山古墳」、山頂に築かれた巨大な円墳「月の輪古墳」など、美作地域からは19ヶ所を紹介。古墳に関する基礎知識や、古墳を楽しむ活動＝墳活に関するコラムなども収録。

著者：はにお@駆け出し古墳めぐりすと
#津山 #真庭 #美作 #鏡野 #勝央 #奈義 #美咲

勝央町の歴史文化にふれる

勝央町の広報紙『広報しょうおう』で2022～2024年度に連載されていたコラムをまとめて、増補した3冊。地域の歴史文化をテーマに活動していた地域おこし協力隊(当時)の水谷さんが任期の3年間、年1冊制作。狛犬、地藏、古墳、祭りなど様々な話題を収録。写真も大きく豊富で、撮影日時入りでおさめられていて資料性が高い。

著者：水谷一
#勝央

がまじん

真庭市蒜山地域で制作されている、県指定郷土伝統的工芸品「がま細工」の特徴や歴史、材料となるがまやシナノキ、制作プロセスなどがまとめられている。県南出身のデザイナーの山下さんががま細工に出会い、「もっと知って欲しい」という思いで自ら取材を行いまとめた1冊。変形サイズやページごとに異なるデザインも魅力。

デザイン・編集：山下めぐみ
#真庭



aube.

aube.(オーヴ)とは夜明けのこと。2009年から2015年にかけて不定期で発行された取材記録とエッセイ集(全6号)。美作地域ではリース作家の石村朋子、染織家の加納容子、一穂親子、御前酒杜氏の辻麻衣子、自然栽培の蒜山耕藝などを取り上げている。2026年には11年ぶりの新作aube.2026も発行された。

発行：さらいなおえ(ざっばうさぎ)
#真庭



つるや孝

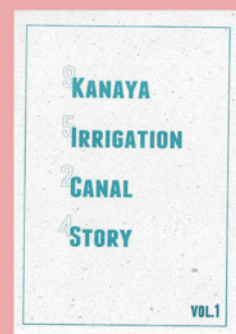
県北エリアでお弁当の製造販売を中心に事業を展開する「つるや」について、各店舗の新旧情報がまとめられている。県北で生まれ育ち、中高生の頃からつるやに親しんできた筆者が、店舗の外観の写真を中心につるやを記録し観察する、まさにつるや愛があふれた一冊。

制作者：安東賢治
(優柔不断ブックス)
#津山 #真庭 #鏡野
#美作 #勝央 #久米南

9524 - KANAYA IRRIGATION CANAL STORY

地域を支えてきた農業用水路「金屋用水」について、味わいのあるリングラフ印刷でまとめた3冊セット。「隧道(ずいどう)」「掛樋(かけい)」など近代水道の仕組み解説や、現状の調査記録、小学校で地域学習のテーマを用水にしたという先生へのインタビューを元にした記事などを読むことができる。「9524」は、用水の全長9,524mにちなんでいる。

企画・編集：酒井悠
#真庭



集まれ！おかやま 名もなき素敵な景色たち

普段から仕事や趣味で岡山県内を歩き回り、写真を撮っている一幅さんが「いいな」と思ったたくさんの風景をシンプルなコピーと写真で紹介したZINE。「路傍のバス」「名前のない絶景」「鳥居と或る風景」「どうして同じ標識がー!?」「いろんな塔」(一幅さんはラジオ塔研究家でもある)など。2022年に発行し、第4号まで発売中。

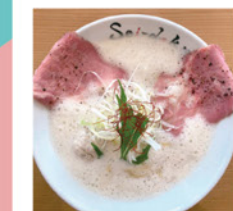
著者・写真：一幅公平
#津山 #真庭 #美作 #新庄 #鏡野 #勝央
#奈義 #西栗倉 #久米南 #美咲

サカイシュラン

～さかいがたべた
まにわのおいしいもの～

地域おこし協力隊として活動していた酒井さんが、真庭市内で実際に食べ訪ねたグルメ情報をまとめたもの。「ミシュランガイド」を意識させられるタイトル、自ら撮影した写真、「やんちゃなふたりの『ハンバーガー』」「器にもこだわった『カレーセット』」など本人ならではのコピーが効いている。2024年10月に第1弾、2025年12月に続編の第2弾発行。

サカイシュラン



さかいがたべた
まにわのおいしいもの
岡山県酒井悠

企画・編集・写真：酒井悠
#真庭



美作国の ローカル ZINE

個人や有志が非営利で制作・発行し、独自のテーマを扱う小冊子・ZINE。近年ではつくり手が集うイベントも多く開催されています。一般的な書店では入手できないZINEの中には、それぞれの地域ならではの内容をテーマにした「ローカルZINE」も多くあります。また、各地域の図書館等でも、個人や有志により独自の視点で制作された郷土資料に出会うことができます。ここでは、美作地域のローカルZINEや郷土資料をご紹介します。

#で掲載されている美作地域(津山、真庭、美作、新庄、鏡野、勝央、奈義、西栗倉、久米南、美咲)を記載

久米南町の我が町の古くて新しい 川柳の小径・公園

久米南町は日本一の川柳町。「川柳の小径・公園」は1977年(昭和52年)に句碑26基でオープン。公園までの遊歩道にはミヤギノハギやアジサイ、ソメイヨシノなどの自然豊かな景観の中に、久米南町のマスコットキャラクター「カッピー」の銅像が建てられています。2026年(令和8年)4月11日には、初めてとなる外国人建立者の川柳句碑1基の除幕式が開かれ、今回で328基(建立者350人)となりました。新しい交流や創作の息吹を育む川柳公園で、古くて新しい言葉の世界をゆっくり歩いてみませんか。



久米南町図書館
司書 Yさん

真庭市の我が町の古くて新しい ビクトリアシアター

真庭市久世の商店街にある古民家を市民が手作りで改装して2022年(令和4年)に誕生したミニシアターです。上映作品はスタッフが厳選した作品が中心で、アート、ドキュメンタリー、海外作品など大手シネコンでは上映されない作品を上映しています。単なる映画館ではなく、「人々が映画について自由に語らい、ゆっくり集える」として上映後の対話や交流も大事にされています。毎年春には、ニューガーデン映画祭(NGFF)が開催され、文化と人、人との新しい関係が生まれる庭となっています。



真庭市立中央図書館
司書 Tさん

西栗倉村の我が町の古くて新しい あわくら会館

1977年(昭和52年)に誕生した旧「あわくら会館」は、長年村民に親しまれてきました。2020年(令和2年)、新たな複合施設として建て替えられる際に名称を公募しましたが、「覚えやすく愛着がある」と多くの声が集まり、同じ名前が受け継がれました。建物は新しくなっても、人が集い、学び、つながる場としての役割や地域の記憶は今も続いています。だからこそ、あわくら会館は「古くて新しい」西栗倉の象徴だと思います。



あわくら図書館
司書 Hさん

奈義町の我が町の古くて新しい いまも生きている巨人「さんぶたろう」

「さんぶたろう(三歩太郎、三宝太郎など)」という民話・巨人伝説をご存じですか？京都の御所まで三歩で往来した大男とされ、中世期に現在の奈義町を含む美作地方北東部に勢力のあった地方武士団の頭領がモデルともいわれています。美作地方一円に多くの言い伝えと60箇所以上の伝承地が確認されています。国道沿いで駐車場が整備されたスポットもありますので、奈義町にお越しの際にはドライブがてら訪れてみてください。また「森の芸術祭 晴れの国・岡山2024」では、俳優・ダンサーの森山未来さんプロデュースによるアーティストイベント「さんぶたろう祭り」が開催され、あらためて「さんぶたろう」の魅力を多くの方に知っていただくきっかけになりました。古くて新しい「さんぶたろう」は、いまも地域の人々の心の中に生きています。



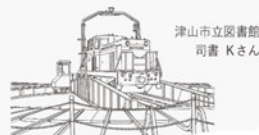
奈義町立図書館
参事(司書) Mさん

巨人さんぶたろう ゆかりのスポットMAP
(奈義町立図書館 HP)
https://www.town.nagi.okayama.jp/library/digital_library.html#landmark
森山未来氏企画イベント「さんぶたろう祭り」(森の芸術祭2024 HP)
<https://forestartfest-okayama.jp/archive/news/news-348/>

津山市の我が町の古くて新しい 津山まなびの鉄道館

(旧津山扇形機関車庫と転車台)

津山駅には姫新線、因美線、津山線の3つの路線が乗り入れ「交通の要衝」として発展しました。旧津山扇形機関車庫は明治時代から、全国の主要駅に数多く建設された蒸気機関車の車庫です。「津山まなびの鉄道館」はその施設を活かして2016年(平成28年)にオープンしました。館内には「あゆみルーム」、「しくみルーム」、「まちなみルーム」などのコーナーがあり、鉄道の仕組みやその歴史をわかりやすく紹介しています。大型連休には「扇形こどもまつり」が開催され、多くの親子連れが鉄道について学び、楽しんで過ごすことのできる施設となっています。



津山市立図書館
司書 Kさん

美作市の我が町の古くて新しい 美作市東栗倉公民館・図書館

美作市北東部にある旧東栗倉村は、県内最高峰である後山の麓にある人口約900人の地域です。少子化により2023年(令和5年)3月末をもって閉園となった旧東栗倉幼稚園は、リノベーションにより「東栗倉公民館」と「東栗倉図書館」として生まれ変わりました。園舎の持つ懐かしい雰囲気や温かみのある木造の空間を最大限に活かし、誰もが気軽に立ち寄れる住民の憩いの場となりました。また、地域文化の発信源として、子どもから高齢者まで多世代が交流する場へと進化しつつあります。かつて園児たちの学び舎であった場所が、今度は地域全体の未来を育む中心地となっています。



美作市立図書館キャラクター
美作市立中央図書館
司書 Tさん

勝央町の我が町の古くて新しい 勝央ふるさとミュージアム

旧勝田郡役所庁舎は、1912年(明治45年)に新築された木造2階建て、寄棟屋根瓦葺の擬洋風建築の建物で、県内では唯一、当時の郡役所の姿を留める貴重な建物として国登録有形文化財となっています。これまで、勝央町役場や郷土美術館として使用されました。この建物を後世に保存し活用を図るため、令和4年度から令和6年度にかけて建物の耐震補強工事と保存修理工事を行い、2025年(令和7年)7月に「勝央ふるさとミュージアム」としてオープンしました。1階の展示室には、原始・古代から近現代に至る勝央町の歴史や古文書などの展示・解説しています。講演会、見学会、音楽イベントなど多彩な催しの場として活用されています。



勝央図書館
司書 Sさん

美咲町の我が町の古くて新しい 美咲町各地 リノベーション施設

美咲町には古民家を改修した農家民宿「シャムブル・ドットE」や古民家宿「Oto」などがあります。自然の中で四季折々の風景を楽しみつつ、日常ではできないような体験も行える場所となっています。また、「白寿荘」のように、旧小学校を改修し介護施設として活用していたり、「旭地域多世代交流拠点『あさひなた』」のように、総合支所や図書館、公民館が入る複合施設として生まれ変わっていたりする施設もあります。古いものを活用することで、地域住民にも美咲町を訪れる方にも印象に残る施設となっています。



美咲町立中央図書館
司書 Yさん

新庄村の我が町の古くて新しい 新庄村の盆踊り

新庄村では毎年8月14日に、新庄宿・がいせん校通りを舞台に盆踊り大会が開かれます。約300年前から続く伝統行事で、5台の太鼓を先頭に、「ひがし」、「まんま」、「こだいじ」、「てんがらこ」、「早備前」の五つの踊りを「口説(くどき)」に合わせて踊ります。100名を超える踊り手が集う村の夏を代表する風物詩です。近年は保存会員の減少で継承が課題となりましたが、中学生が「ふるさと新庄学」で盆踊りを学んだことをきっかけに、今では中高生も保存会の一員として活躍しています。地域ぐるみで伝統を次世代につなぐ、新庄村の「古くて新しい」文化です。



新庄村
教育長 Sさん

鏡野町の我が町の古くて新しい ウランガラス

鏡野町上斎原の人形峠では、1955年(昭和30年)にウラン鉱床の露頭が発見されて以来、ウランの探掘、濃縮ウランの製造、技術開発、研究が行われてきました。現在はウランの探掘は終了しましたが、終了後の1998年(平成10年)、ウランを活用したオンリーワンの地域特産品の開発として、人形峠のウランを着色剤として使用したウランガラスの開発に着手し、2006年(平成18年)にはガラス工房も併設した「妖精の森ガラス美術館」がオープンしました。紫外線を当てると黄緑色に発光するウランガラス製品は観光客にも人気で、今では地域の観光産業の一端を担っています。



鏡野町「みずのり」
鏡野町郷土博物館
学芸員 Kさん

第23回 おかやま県民文化祭
これがOKAYAMA! プログラム

古くて新しい、
美作国の
うつろい

SPECIAL WORKSHOP

レポート

「フィルムカメラで撮って感じる
“うつろいの時間”」

11/29^[土]
10:00~12:00

開催地：作州民芸館2階(津山市西今町18)

4x5インチの大判フィルムを使用して、実際に撮影まで行うワークショップを津山市の作州民芸館で行いました。

まずは講師の杉浦さんがフィルムカメラの仕組みの説明を行い、撮影の流れについて実演を交えながら解説しました。フィルムの取り扱い。カメラ本体、広角・望遠などを使い分けるレンズ、三脚、露出計等の機材について。やることも多いので、効率よく撮影を行うために、数人で担当を分けて撮影を進めることが伝えられました。

撮影前には、参加者で各自ロケハンを行い、撮影したいものや場所を決めていきます。洋風のデザインを取り入れた作州民芸館の建物やインテリア、伝統的な建築が残る城西地区のまち並み、人物など、テーマはそれぞれです。撮影では、カメラマンが自らの手を動かすのではなく、何をどう写したいのかを伝えながら、三脚の位置と高さ、使用するカメラのレンズなどを指示する役となって、参加者が協力して撮影を進めました。始めは恐る恐る撮影機材を扱っていた参加者も、要領が分かってくるとスムーズに進行できるように。速くのものや、屋外から屋内を狙う難易度の高い撮影では、杉浦さんの経験に基づいたアドバイスをふまえて行いました。

撮影はほぼ一発勝負。フィルムに撮影するという行為を通して、しっかりと風景に向き合うことができたワークショップとなりました。参加者が撮影した写真は、後日現像して、郵送でお届けしました。

〈講師〉杉浦 慶陀(すぎうら けいた)

1980年、岡山県津山市生まれ。自ら育った土地である岡山での撮影にこだわり、大判カメラを使いながら「人間と自然の関係性」をテーマに活動続ける。主な受賞歴「第2回岡山県新進美術家育成財団賞」大賞(岡山、2009年)、「福武教育文化財団 福武文化奨励賞」(岡山、2010年)など。



第23回 おかやま県民文化祭
これがOKAYAMA! プログラム

古くて新しい、
美作国の
うつろい

SPECIAL WORKSHOP

レポート

「映画を聴こう！
映画を鳴らそう！」

11/1^[土]
14:00~16:00

開催地：ピクトリシアター(真庭市久世2581)

音の無いアニメーション「サイレントカートゥーン」に、自分たちで音をつけてみるワークショップを真庭市のピクトリシアターで行いました。

まずは柴田さんから、イントロダクションとして映画と音の歴史解説と、映像の紹介。1895年にフランスで音の無いサイレント映画。1927年に音、台詞のあるトーキー映画が誕生。この間につくられた作品は、様々な工夫により音を別に用意して、映像に合わせて流すということが主流でした。映像やアニメーションの動きも少し大げさで分かりやすい表現になっていることなどが紹介されました。

ワークショップは、江南さんの進行でまず参加者に簡単な自己紹介をしてもらいながら、音にまつわるエピソードを話してもらいました。続いて、それぞれに持参してもらったものの音を鳴らしながら、それがどういったことに使えそうか、違う鳴らし方ができないかなどを試してみます。例えば「キンチョール」の缶、打楽器で使うマレット(バチ)で叩くとなかなかいい音がして、叩く場所で異なる響きになること。長さを測るメジャーも、引き出して伸ばす時の音が特徴的であることなどが分かります。

続いて、実際に音をつける作品を何度か鑑賞します。1931年(昭和6年)に発表された日本のアニメ映画で、村田安司さんの『お伽のお爺さん』。「オープニング」「寺の庭」「夜空」などシーンがいくつかに分けられることをボードに書き出して確認して練習の後、作品に合わせて皆で音を出して録音。その音を映像に合わせて再生して、出来映えを楽しみました。

〈講師〉江南 泰佐(えなみ たいすけ)

音、声、音楽から派生するいくつかのことに取り組みながら国内外で活動する音楽家、メディアアーティスト。アウトプットはその都度、楽器演奏、作曲、非楽器演奏、サウンドデザイン、サウンドインスタレーション、ラジオコンテンツ制作、盆踊りなどカタチを変える。

〈進行〉柴田 祥子(しばた さちこ)

2021年藤山ミュージアムへの転職を機に、東京から岡山県真庭市に移住。ミュージアムの業務の傍で、市民有志でミニシアター「ピクトリシアター」を立ち上げ、年に1回「ニューガーデン映画祭」を開催。カフェバー&ギャラリー「simauma」を開店準備中。

